



北越雪譜
二編 終

ル 4
6316
6





北越雪譜二編下卷

目錄

- 鳥追槽（順列上下小）
- 地獄谷の火
- 無縫塔
- 年賀の哥
- 管神御傳畧
- 異獸
- 弘智法印
- 白鳥
- 浮嶋
- 美人



萩野藏

- 雪霜
- 越後の人物
- 北高和尚
- 逃入村の不思議
- 田代の七ツ釜
- 火浣布
- 土中の舟
- 兩頭の蛇
- 石打明神
- 蛾眉山下の標準

雪譜二編卷之下

目

文鏡堂藏

此書の前編上の巻雪中の火といふ条小六日町の郡西の山手小
 地中より火の燃事を見るやが地獄谷の火の度をいふや
 小なる火の燃事我越後小名高く七不思議小かどいふ蒲原郡
 如法寺村百姓莊空門七兵衛孫六が家小地火ありが家小ある地中より燃事火ハ普く
 人の知所ある事ども其火より盛大有るハ魚沼郡のちちの小千
 谷の在地獄谷の火より唐土小是を火井といふ近來此地獄谷小家
 を作り地火を以湯を燂客を待浴さむ夏秋のそとめ
 まへハ遊客多し此火井他国ハさきとて越後小多し先年蒲
 原郡の内或家小井を掘し其夜医師來りて井を掘し度
 を聞家小飯時挑灯を井の中へ入るとのありしゆと井を見し立
 たりし井中より俄小火をいづ火勢さかん小燃あがりけり近
 隣のものども火事ありとてをせつけ井中より火のものを見て

此井を掘しゆ此火ありとて村のものども口小主人を罵り恨
 けし主人も此火をおそとて埋るると此地火一陰火といふもの
 如法寺村の陰火も微風の気いづる小燐燭の火をさせ風氣干小應
 て燃陽火を得さば燃を寛文のむし在右空門が如法寺村庭小韃を
 ほうひする時より燃さむとて前小井中の火も医者挑灯を
 井の中へいづゆとこの陽火小いゆとていづるありとて又頸城
 郡の海辺小能生宿といふ北陸道の官路あり此宿より山手小入る度
 二里をり小間瀬口といふ村ありこの農家小地火をいふを度如法寺村
 の地火小同とて此やより用水小多しとて所中ハ旱のをりハ山小就
 井を掘小堀し水を得る度ありある時井を掘し横小し時穴の闇
 きをててをたぬ小炬を用ひし小陽火を得し陰火忽ち狀あがり人
 是う為小焼死しけり是等のまどもをいひしる小越後のうちハ地

火をいざと火脈の地多くしきと陽火を得ぞとて發せざるも多し

百樹曰余小千谷あり一時岩居余小地獄谷の火を見せんを
社友五人を伴ひ用意の酒食を美奴二人小荷しり余と京水と同
行十人小千谷を去る西の方・新保村・菰川新田といふ村を
を歴る一宮といふ村の山間の茅畦曲節て茲小抵行程一里半
可あり是日ハことハ快晴て村落の秋景百逞目を奪ふて平山
一ツを踰る坡あり則地獄谷といふの徑あり坡の上より目を下せ
一ツの茅屋あり是本文小い混堂あり人々坡の半小いなり時
茅屋の樓上小四五人の美婦ありとておのく檻小よりて遠小この
人々を指もありあるハ笑ひあるハ名をよびあるハ手をもちたる
あるハ手をあげてまわく四面皆山なり老樹鬱然とてて翳塞の

中小個美人を見んと愕然一是狸小ありとてんばらありて狐ありん
といひけし岩居友と相顧手を拍て笑ふことハ小千谷の下と
町といふ所の酒樓小居酌採の哥妓どもあり岩居朋友と計り
竊小此小招もきて余小貞とせん為とて渠ハ狐小ありとて岩居
小魅とてさるあり已小地獄谷小より皆樓小のやまり岩居ハ余と
京水とを伴ひてかの火を視せしむとてもて茲谷ハ山櫻多あり
也と櫻谷とよびるを地火あるをりて四方五十歩六尺をひきまて
平坦の地とあり地火を借りて浴室とあり人の遊ぶ所とせりとて
櫻谷とよびる処地火のため小地獄とよぶこと花ハさきとて
るがーとてその火を視る小一ツの浅き井を作りてその井中
より火の燃る事常の湯屋の火よりも盛なり上小釜あり一間
四方の湯槽あり細き竈ありとて石の山の清水を引き湯槽小あり

とて湯ハ槽の四方ハ溢れどつらをりつて此湯温くも熱くも
 天工の地火盡る時ハいつと人作の湯も盡る期あり見ゆも清潔
 ある事ハいつと此混堂ハ積まき厨処あり灶も穴あり地
 火を引く物を烹新小同ト次ハ中の間あり床の下より竹箆を出
 一口ハ一寸むり銅を鉗て火を出さしむ上より自在をさげ此火
 小酒の烟をありあり茶を煎夜ハ燈火とをさえて熟此火を視ふ
 箆をさるること一寸むりの上ハ燃る扇ハあつげバ陽火のむり小
 消る箆の口ハ手をあててむりむり風をうらむのそ敷燭の
 火を翳せば忽然とくもゆることとどりの如く主の翁ハ白この火
 夜ハ昼よりも燥烈く人の顔青くもゆるとらり翁ハ妻水のうち
 よりゆる火を見せやさんと混堂のうらむ小僅の山田ある所
 かりり田の水の中ハ少一湯とらあるふつけぎの火をうごし

小水中の火蠟燭のゆらぐ如く左婆がらり此火のやうゆらぐ
 処やゆらあり夜ハ少むりむり火をゆらゆらとて
 りり余ハ江戸の目ハ視る所とらり奇妙あり唐土ハ此火
 を火井とて博物志或ハ瑯琊代醉小見えさる雲臺山の火井も
 此地獄谷の火のごとくも事ハ洪大なる此谷の火ハ勝らば
 唐土と日本とをわけて火井の最第一といふは是を見らる事
 越遊の一奇観あり唐土ハ火井の在る所北の蜀地ハ属て日の本の
 火井も北の越後ハ在り自然の地勢ハゆるやん・さて一人の
 哥妓梯上ハゆるむり小岩居を呼ぶとをて樓小のむり
 余ハ京水とて小此湯ハ浴を樓上ハ早く三弦をひらせり浴
 をりり樓小のむり既ハ杯盤狼藉たり婢媼哥妓袖をつら杯
 素手弄糸朱唇謡曲迦陵頻伽の声外面如芥の色真を添まら

地獄谷遠然極樂世界と云ふなり此妓どもを養ふ主人も亦小
 來り居る從り料理人小臭一する魚菜を調味させさる小
 宴を開く是主人俗中小雅を挾ぐ恒小文人を推慕ゆ是
 日も亦來りて余小面識をるを岩居小約せしと此人觀る
 ゆゑ自ら双坡樓の家号をその滑稽此一をりて知るべし飄逸
 洒落かゝる人小愛せし家の前後小坡ありと云ふ双坡の字
 下し得て妙あり双坡樓扇をいづて余小句を云ふ妓も持し
 扇を出て京水画をさる一余即眞を書きこきを見し岩居を
 せしめかゝる壁小句を題し更小風雅の眞をもりりりかて
 やり目も傾きけし歸路を促しけし小哥妓ども草鞋めり來
 りしと云ふと云ふなりと云ふのついでに余も亦しと云ふを筆
 せしむる醉眞の騒鬧し途を行く細流ある所小

いよまば紅唇粉面の哥妓紅視を褰て沸る花姿柳腰の美人
 等しじををいて水をこすると余が江戸の目小最珍らしく眞
 あり醉密ぢんくをうらハ酔妓歩く躍る古繩を蛇と駭せば
 と云ふと云ふ妓情し片足泥田(うら)を衆人駭然と此
 途ハ凡て農業の通路と云ふ越之茶店も亦半途小至りて
 古き社小入りてやま一妓社の后小入りて立ちり石の水盤の
 注る水を僅小掬手を洗ひし私小去りてあんなそのま樹下小
 立せ玉ふ石地藏芥の前小並びたちる懐中より鏡を出て鉛粉
 のと云ふをけしをけし唇紅をさして粧をるまことこの粧具を
 くり小石佛の頭小置り外面女芥内心如夜又のいまもあまハ芥ハ
 あふと云ふ玉あんと云ふ一日も已小下晡されぬのゆを
 まりめり小千谷へりき

此紀行別本一あり吾々
 北越旅談小を

正月鳥追櫓之圖

圖中 山をあす所

皆 雪たのび



置

新卒都未芳
華二月初鷺見
身寄白雪如嫌
去冬晚在穿庭
樹化飛是

涼仙史圖



○越後の人物

板額いさげ女メ八加治明神山の城主長太郎祐森が室古志郡の産あり又三
 歳の小児も知る酒頼童子ハ蒲原郡沙子塚村の産今猶屋敷跡
 あり始ハ雲上山国上寺の行法印の弟子あり玄翁和尚ハ伊夜彦山
 の麓ふもと箭野村の産あり近世小いころ徳僧高儒和哥書画の人あり
 一もあつたことども遠く四方小雷名せまきくは画人 吳俊明のち江戸小近年相
 撲ま小越海鷲濱ハ新写の産九牧龍ハ高田今町の産関戸ハ次弟濱の産也
 常入とこゆき力士の聞えありハ頭城郡の中野善左門立石村の長兵衛蒲
 原郡三条の三五右門是等無又の太力ゆき人の知所あり又鑑写小近き
 横戸村の長徳寺谷根村の行光寺も怪力のきこえたり此人ハいづ
 も獨ひとり一つ鐘を軽く掛かぐりてるやぶの力ハ有一人あり又孝子ハ
 村上小次郎新癸田の菊女頭城郡の僧知良近ハ三嶋郡村田

村の百合女百姓伊兵衛新癸田荒川村門左門百姓丑塚原の豆腐賣春
 松鎌兼みハ蒲原郡新塚村百姓新六いづもも孝子の名一国ハ高かりき今
 存在そんざいもありとや

百樹曰余越後小いころ板額あるハ酒頼童子の旧跡をたぐみ新
 写かをも一覽らんする名の聞えする神佛をもをりてたてまつり寺泊小のころ
 順徳帝の鳳跡義經夢因国師法然上人日蓮上人為兼卿遊女初
 君等の古跡もたぐみをたぐみハ小越後小入りてのち氣運順を失
 ハ年稍儉けんハ穀の價日小躍人氣穩まありて心歸家ハありて
 風雅をうしあハ古跡をも空ひまハ過り惟平あハ旅人りよじんとありてき
 およびする文雅の人をも刺問さしもんたりハ今小遺憾あり嗟乎年の儉
 せいをいらんせん

○無縫塔

蒲原郡村松より東一里來迎村小寺あり永谷寺といふ曹洞宗あり此寺の近く小川あり早出川といふ寺より八町をり下小觀音堂ありその下を流る所を東光が淵といふ永谷寺(入院の任職あり)此淵(血脈を投げ入る事先例あり)さて此永谷寺の任職遷化の前年此淵より墓の石ふる(圓き自然石を)一ツ岸小出是を無縫塔と名づけつゝ此石出るとその翌年必仕任職病死する事むりより今ふりて一度も違ひする事あり此墓石大小小より任職の心小應せぬ淵(之せがその夜淵逆浪)住職のころむ石を淵小出たる事度あり先年凡僧と小住職一此石を見て死を懼き出奔せし翌年他国ありて病死せしとをわらふ此淵小灵あり天然の死を示るる一友人北洋主人蒲原郡見附の邊書をよす件の寺を覽る話本堂間口十間右小庫裏左八間小五間の禅堂あり本堂ふいす阪の左り小鐘樓あり禅堂のうら小蓮池あり

上小坂あり登りて住職の墓所ありかの淵より出たる圓石を人作の石の臺の脚ありふのせと墓とを中央あるを関山とて左右小次第一々三基あり大なるハ徑り一尺二三寸むり八九寸六七寸ありもあり大小ハ和尚の徳小應をといひつゝふとを臺の高さいづも一尺むりありと語らむ此かの淵小灵ありといふむり永光寺のやとり小貴人何某住玉ひ小その内室色情の妬み夫をうと東光が淵小身を沈め冤魂悪竜とあり人をもあらしを永光寺の関山名をきき血脈をの淵小あつりて化度一玉ひゆ急悪竜得脱ありその礼とてかの墓石を淵小いづて死期を示す是以今ふりても入院の時ハ淵小血脈を沈むと寺説ふつゝふとを○さてま我隣國信濃も無縫塔の事あり近江の石亭が雲根志ふり前編灵異之部信濃国高井郡湯村横井温泉寺の前小星河と幅三町むりの大河

あり温泉寺の住僧遷化の前年小此河中へ何方よりとも高く高さ
 二尺をうりある自然石の方小くうろくしき石塔一ツ流ききり実り
 彫刻せりごとくあり天然の物あり此石出ると土民ども温泉寺へあり
 せる事ありきらめり翌年住僧遷化あり則ち小此石を立す九代
 以前より始り九代の石塔同石同様あり少くも違はず並び
 あり或年の住僧此塔の出る時天を拜しこの我法華千部讀
 經の願あり今年ふり満り何とぞ命を今年延し玉へと念
 してこの塔を川中の淵小投こたり何事もなく一年すぎり千部
 讀經のすそ一月小件の石又川中ふらり其翌年をじり遷化
 ありとこの次の住僧塔のとき時何の移ひもあらず淵へあげると
 幾度あげあつても其夜そのふいふり翌年病死ありととぞ
 此辺より是を無帽塔と名づく以上一條の全文越後小永光寺信濃小温泉

寺事の相似する一奇怪といふ。○百樹曰牧之老人が此草稿を視
 て無縫塔の縫の字義通トゴテ誤字ゆやとて劃示し問ひけ
 るに無縫塔と書傳らるるにいひるに雲根志あり無帽塔とあり
 無帽の字も又通トゴテおそく無望塔ありあらん住僧の
 心ゆ死がゆさ小無望塔ありと小無誓の一笑を記し博
 識の確拠を録つ

○北高和尚

魚沼郡雲洞村雲洞庵ハ越後国四大寺の一あり四大寺と云滝谷の
 慈光寺村松小村上の耕雲寺伊弉彦の指月寺雲洞村の雲洞庵
 あり十三世通天和尚ハ霜臺君の謙信の事親籍ゆり高徳の聞えハ
 今も口碑のこもり景勝君も此寺小物学び玉ひとて一国の
 大寺あり古文書宝物等も多しその中小火車落の袈裟と

いふあり香深の麻と見ゆる小血の痕のこもり是を火車落とく
 宝物とくる由來いむり天正の頃雲洞庵十世北高和尚といひ
 学徳全備の尊者ありちりせり其頃此寺小ちうた三郎丸村の農家
 小死亡のりのありし小時も冬の雪ありつぎ雪吹もやむざりけむ
 三四日ハ晴をもちて葬式をのぞく小晴ざりたむ強きいとも
 をあり且那寺あり北高和尚をむり棺をいづ親族いさ
 人々蓑笠小雪成あぎて送りゆくその雪途もや半小いりし時猛風
 俄小ちり黒雲空を布満て闇夜のぞいづともあり火の玉飛来り
 棺の上小覆かり火の中小尾はあまたる稀有の大猫牙をもち
 鼻をもち棺を目づけるとんと人々こをを見く棺を捨あけの
 まろびつ逃まると北高和尚はまろも恨むりろろ口小呪文を唱
 大声一喝鉄如意を擧ぐ飛つ大猫の頭をうち玉ひふかから

や破らん血をさし衣をけり妖怪ハ立地小逃去りけ
 る風まや雪もをきて事あり葬式をいともいけり寺の
 旧記ふのこもり此時めるるを火車落の法衣を今ふつ

百樹曰余越遊塩澤小在時牧之老人小伴と云洞庵小

いり塩沢より庵主小對話ありかの火車落の袈裟といふ物

その外の宝物古文書の類をも一覽せりいりあも大寺あり祈禱

の二字を大書する堅額ハ順徳院の震筆ありと云佐渡(辻

震筆)門前小直江山城守の制札あり放火私伐を禁むるの文あり

庭中池のちり智勇の良将宇佐美駿河守又死の古墳在り

先年牧之老人施主とて新小墓碑を建てり不朽の善行也

いづり唐土の書ありあも散見せり夜叉の怪ハ

○羊賀の哥

北高禪師勇氣圖



天満宮の崇ありとて一村の人皆無筆あり他郷小身を寄て予習
 をまじり崇ありとて一村の人皆無筆あり他郷小身を寄て予習
 とあるこのゆゑ小文字の用ある時ハ他の村の者小たのめて書用を弁む
 又此村の子どもあど江戸土産とて錦繪をゆひする中ハ天満宮の繪
 あまじつあつとて神の崇りの兆ありし事度くありしとてまじりかの大
 塚小塚を時平大臣夫婦の古墳ありと古くゆひつゝあるも何れ由縁あり
 事ありて一管家の抗紫ゆて覺ゆ玉ひするハ延喜三年二月廿五日あり
 今を去る事百樹曰く今今といひハ牧之老人ガ此まじりたる文政三年をゆひあり九百十五年前あり今ゆひ
 ても神霊の明けたる事ありて一尊むとて一さて又とてふるのまじり事
 あり南谿が東遊記を見り小南谿東遊一津輕小居る時六七日も
 風雨つゞき一うち所の役人丹後の人や居ると旅店毎ふきび一たつて
 ゆゑ南谿あはれ小そのゆゑを問ひけまじりありとて一當国岩城ハ人の

ありする安壽姫對王丸の生国ありまじりむの一人此御あつてを岩城山
 の神小まじりて社今小在り此兄弟丹後小まじり三庄太夫が為小困苦
 するゆゑ小丹後の人をゆゑまじり丹後の人此国小入まじり大風雨有て
 日をこする事む一よりの事あり丹後の人此国の塊をゆゑまじり風雨なら
 ちらゆむゆゑ小丹後の人や居ると搜まありとて一りと南谿子此事小遇
 たりとて記せり右小りの兄弟の父岩城判官正氏在京の時諺小あひて
 家の亡びするハ永保年中の事あり今をさる事むとて七百五十余年ハ
 兄弟の怨魂今小消滅せざる事人知を以論むとて百樹曰安壽ハ對王を妻あるは塩尻
 廿三卷小りハ参考
 西遊記前編景清が塚ハ日向小あり世の知る処あり其母の塚ハ肥後国杵麻
 の人吉の城下より五六里と東切幡村小まじり此所小景清が娘の墳も
 あり一村の氏神小まじり此村まじり小盲人を忌む盲人他処より入まじり
 必崇あり景清後小盲人小ありゆゑ母の灵小盲人を嫌ふとて所の人の

りりト記せりことこの度逃入村の不思議小類せりあることと件の
ニハ社ありて丹後の人を忌。墓ありて盲人をきらふあり逃入村と
墳あるゆゑ小天満宮の神。此地を忌玉と云ふんを考ふる
かの古墳はいよ。時平が血脈の人あり

百樹曰余越遊して小千谷に在り。時所の人逃入村の事を語
りて古墳を見玉。案内を告ぐ。といひて。管神の玉と
所。文墨の者強くゆ。きふもあ。福言話をき。のそめ。ゆ
かりききて。天神様とい。三歳の小兒も尊び時平ときけ。此
御神を諛言。たる悪人あり。其悪千古。上下。哥舞妓
狂言。作り。婦女子も普く知る所。童稚女子ハその
實跡を。稀あり。さ。か。冊子。此
御神の事を記さ。い。か。逃入村の因。より。こ。

書載

○謹心案。小菅原の本姓ハ土師あり。土師の古人といひ。が
先仁帝の御時大和国菅原といひ。所小住するゆゑ。土師の姓を菅
原不改らる。管神御名ハ道實字ハ三童名を阿呼と云。阿呼の
余が考。あれ。文。仁明帝小仕。玉。文章博士。参議。善卿の第三の
長。御子。兼和十二年。小生。玉。七歳の時。红梅を御覧。梅の花
紅脂のいろ。似。阿古。顔。ゆ。けり。十一の春。齊衡。父君
より。月下梅。の。詩。の。題。を。玉。時。即。坐。小。月。輝。如。晴。雪。梅。花。似
照星。可憐。金鏡。轉。庭上。玉房。馨。御祖父。清。御父。善。の。学。業
を受。嗣。玉。文。藝。の。武。事。の。疎。を。ま。り。り
○清和天皇の貞觀元年。御年十五。御元服。同四年。文章生。小
拳。下野の權掾。同十四年。御年廿八。御母。伴氏。身

まろり玉の陽成天皇の元慶四年八月晦日御父是善卿も身まろり
 玉御年九此時 管神の御年四十一あり 寛平四年御年四十八
 類聚国史二百巻を撰とく玉ふ和哥の管家御集一卷詩文の管家文章
 十二巻同後草一卷後草ハ筑紫今も世に傳ふ大納言公任卿が詠集の
 入とくとく 管家の詩小「送春不用動舟車 唯別殘鶯与落花
 若使韶光知我意 今宵旅宿在詩家」此御作ハ 延喜帝のまご
 東宮より時令旨ありて一時の間小十首の詩を作り玉ひる其一ツ
 あり○まご御若年より數階を歴りて後寛平九年御年五十三
 權大納言右□將を兼らる此時時平大納言小任せしと左□將を兼
 管神と並び立ち執政より此時大臣の官ありしゆゑ大納言めて執政
 より此年七月三日 宇多帝御位を太子敦仁親王ナホク譲り玉ひ朱雀
 院ハ入らせ玉ひ亭子院とち奉り御法体ありて 寛平法皇とて

中奉る 敦仁親王を醍醐天皇とて後よりハ延喜帝とち奉る
 御年 十三 年号を昌泰と改元を同二年時平公左□臣 管神右□臣
 相俱ふ 帝を補佐し奉らる時小時平公二十七 管神五十四兩公
 左右の□臣ととも方徳年齡双壁とあきば故小心齟齬しと相
 和せし是 管神の諛毒を得玉ふの張本あり○そもく時平公ハ
 大職冠九代の孫照宣公の嫡男より代り□臣の家柄よりあるの
 めりと 延喜帝の皇后の兄ありとのゆゑふ若年より□臣の貴
 重小職しあり此人の乱行のツを言ハ叔父たる大納言国經卿ハ年
 老叔母より北の方ハ年若く業平の孫女より絶世の美人あり時平
 是小意く老夫人もまご夫の老よりを嫌ふの心あり時平或日国經の
 許小宴し醉與ふまごより夫人を貫りんとしひを国經も醉
 して戲言とちひよりゆりりして國經ハ醉臥するを見と叔

母を車くるまふこひこまこ入こりこ立こりこりこ母腹はらふこ生こまこるこを中納言ちゆうなごん敷忠しゅちゆうとこひ

時平ときへいの不道ふだう此こ一いつを以もつて其餘そのよを知しるこづこかこるこ不道ふだうのこ人ひとありこまこ

寛平かんへい法皇ほうおうのこ御心おんこころ少すこ時平ときへいの任たねを除のぞきこ菅神すがかみ御おん一人ひとり小国政こくこくせい

をこまこせこ玉たまりことのこおこがこりこめこりこありこしこ小延喜こえんぎ元年元年正月正月三日三日

帝みかど亭子院ていしゆいん朝あさ覲しんのこをこりこりこ御内おんうち心こころをこ示しめすこ玉たまひこふこ帝みかどもこ大

事ことのこよこりこをこ内勅うちつありこふこ菅神すがかみ固辭こごじなこまこひこふこ許ゆるすこ玉たまひこりこけりこ

同日どうじつ七日なな後ご二に位ゐ小密事こみつじ比ひ密事みつじいこふこりこりこ時平ときへい公こうの聞きかふこ事こと一いつ事こと先さき

帝みかど小説せつをこりこりこ君きみの御弟おんてい齊世せいせい親王しんおう八道實はちだうじつの女むすめをこ空

過とりこりこ雷かみなり遇あ厚あつ一いつ是以こゝ君きみをこ祭まつりこりこ親王しんおうをこ立たてこりこ国柄くにがらをこ一人ひとりの手

小握こにぎんことの密謀みつぼうありこ法皇ほうおうもこ是こゝ小應おんトこ玉たまりこの風説かぜせつありこと

言ことをこ巧たくましこ小説せつしこけりこ時とき小延喜こえんぎ帝みかど御年おんねん十七じゅうしちありこ皇太后きうごうハ

時平ときへい公こうの妹いまいありこまこ内外うちがはよりこ誤毒ごどくを流ながしこりこ若帝わうていの御心おんこころを動うごかしこ

奉ほうりこりこりこありこ○こさこりこ時平ときへい公こう毒奏どくそうをこ中なりこりこりこ同月どうげつ廿五日にじゅうご左降さかうの

宣旨せんしゆ下くだりこりこ右みぎ□こ臣おみの職しやくを削くりこりこ從したがいこりこ二位にゐハこりこりこ太宰たいさい權師けんしとこ

三年三年ノ一ノ延喜三年正月の頃より 御心例ありて二月廿五日
 太宰府ノ薨ト玉リ御年五十九御墓ハ府ノちラ四ツ辻トいハ所
 小定め 御棺をいテる途中小トまリくテ別テ所ノ所ノ
 葬ヲ奉ル今ノ 神齋是アリ。延喜五年八月十九日同所安樂寺
 小始ク 菅神の神殿を建ラる味酒ノ安行トいハ人是をウけ
 たりテ同九年神殿成ル是ヨリサ三ノ四人ノ御子配流をめス是
 玉ハいハのノ故ノ位ハいハ玉ハ。神去玉ハのち水旱風雷ノ天
 變ヲもテいハる人ノ心安ク是也。菅公ノ崇リるルんルと
 風説ヲけテとヤ。○菅神薨去より七年小あリて延喜九年
 四月左ノ臣藤原時平公薨シ歳三十九又一男八条ノ大将保忠ノ
 弟中納言敦忠ヲび時平ノ女延喜帝ノ孫ノ東宮マでも相ツきテ
 薨セらル又時平ノ諛毒小荷贍るル菅根ノ朝臣ハ延喜八年十月

死スとシらルノ事トもシ菅神ノ崇アリとセ小流布セらル
 菅公ノ冤譴を世ノ人哀戚スたりテ也トヤ。○延長元年三月保
 明太子薨去時平ノ孫ハ。○同年四月廿日贈位正二位本官ノ右ノ臣
 小復一玉ハ。○一条院ノ御時正曆四年五月廿日
 菅神小正一位左ノ臣を贈ラるル。○同年閏十月十九日
 大政ノ臣を贈ラるル。此ノ御神ノ御位ハ正一位大政ノ臣トもシ
 後年屢ク 神灵ノ赫々たるニ徴アリ。天満宮成
 自在天神ノ贈称アリ。○七ノ醍醐天皇ハ在位百廿代ノ御皇
 統中もシ殊ノ御徳達ス。延喜ノ聖代ト称シ。御在位ノ
 久リ也。延喜帝トもシ奉ル。御若冠ノ時ハ也。賢者
 の聞エるニ重臣ノ 菅公を時平大臣ガ一時ノ諛口を信シ玉ハて
 其實否をモ知ラずシ玉ハを奉示ス菅公を左遷ありテ御一代の

失徳とやいふべきありを 菅神の恨と玉ひびりハ配所の詩哥小
 てもあつゝ 菅神はうらと玉ひびりも賢徳忠臣の冤謫を天のい
 きどわりて水旱風雷の異変讒者奸人の死亡ありしゆん俗子ハ是
 を菅神の怨灵と見るハ是又菅神の賢行小瑾つけありあれ
 ども竊小謂く賢者ハ旧悪をかりのせといふも事小こそよき冤謫
 慄然のあまり諛言の首唱する時平大臣を肚中小深く恨と玉ひ
 一もあつゝむ本編ふり逃入村を神の忌玉も其徴ととるの
 一ツもあつゝ〇神去り玉ひよりサ八年の後延長八年六月廿六日
 大雷清涼殿小墮て藤原清貫大納言平稀世右中弁其外時候の人々
 雷火小即死を 延喜帝常寧殿小渡御ありて雷火を避たまふ
 是をも 菅神の崇ととるハいよく非説ありと安齋先生伊勢平藏の
 管像辨もりり〇太宰府より一里西小天拜山あり 菅神あの

山ふのわりて朝廷を怨む告文を天小捧り祈り雷神とあり
 玉ひりといふ賢徳の御心をあつゝ俗子の妄説を今小傳たな
 あり和漢三文面會小實一小記一〇不出門行の御作小
 心を深めざるあわん〇法性坊尊意叡山小在一時 菅神の
 幽灵來り我冤謫の夙懃を償とを願くハ師の道力をりて拒こと
 ろれ尊意曰卒土ハ皆王民あり我ハ 皇の詔をうけ玉ひるを
 避る所あり 菅神作色あり適柘榴を薦 菅神嘔吐を
 焰をり玉ひりといふ故事ハ元亨釈書の妄説小起了此書ハ今天保
 廿年前元亨二年東福寺の虎関和尚の作ありかゝる奇怪の事を記すハ佛者の筆癖ありと安
 齋先生もいり〇白太夫といふハ伊勢渡會の神職 菅神文墨小於
 格外の懇友ありゆゑ小北野小祀り今も社あり 此御神の事を作
 松王櫻丸の名ハかの梅ハ飛の御哥小〇北野の御社の始ハ天慶五年六月九日より
 よりくまらけり名あり



五十二編卷之六

廿一

文英堂藏



七ツ釜之図

雪譜二編卷之七

文英堂藏

ありと名 文海披沙 菅神も此論不近 逃入村の事を以ても千年
ふちうに神の霊の赫々たること仰ぐべし 敬ふべし 蓋冥々あふ年月を
置くとまげば百年も猶一日の如くあるべし 菅公の神霊するおき事 和漢
ミタテ一まのこをさるる事あり

○田代の七ッ釜

魚沼郡の官驛十日町の南七里計 妻在庄の山中 此へんまふ 小田代といふ
よきなりといふ 村あり 村を去事七八町ふ七ッ釜といふ所あり 里俗滝つがを
釜といふ 滝七段あり 由多
七ッ釜とよひきてより 鉤子の口不動滝ありしゆも七ッ釜の内にて妙景
奇状筆をのりて云々 第七番目の釜の地景を爰小圖をるを
其大槩をあるべし 此所の絶壁を堅御号横御号といふ 里俗伊勢よ
り御師の持きてくるおき箱を ちがうさまといふ 此絶壁の石の箱の
状ふ似たるをのりて斯ゆあり 其の似たりといふ此せのへきの石とこの
落るあるを視ると厚さ六七寸計ふり 平らあり 長さ六二四尺をり

長短ハひとしきく石工の作り色さうが如し 此石数百万を堅小積重にて
此數十丈の絶壁をあると頂ハ山ふつとて老樹鬱然たり 是右の方の
堅御がうあり 左りハ此石の寸尺ふたがふる石を横小積りて數十
丈をある事 右ふ同ド そのさま人ありて行儀よくつとあげらるごとく
寸分の斜あり 天然の奇工奇く妙く不可思議あり 此石の落たるを
此田代村の者さまの物の用ふ片石もて他所不用ふも 崇ありし
事度くありとて余文政三年辰七月二日此七ッ釜の奇景を尋て目
撃したるを記す 天の范々たる他国も是小似たる所あり 姑くその
類を示す ○百樹曰余仕不在一時同藩の文学関先生の話ふ
君侯封内の丹波山 山小天然 磨の状ある石をつとあげらる柱のやうある
を並て絶壁をある 満山此石ありとて又西国の山ふ人の作りたる
やうある磨の状の石を産する所ありと 春暉が隨筆ありて見たる事

ありき今その所をわひひごさだ

○又尾張の名古屋の人吉田重房が著する筑紫記行卷の
 九ふ但馬國多氣郡納屋村より川舩より但馬の温泉小抵る途
 中を記する條ふ曰。猶舟ふのりて行。右の方小愛宕山宮島村
 野上村石山地名ありと追續あり此石山の川岸小臨する所小奇き
 石あり其形ち磨磐の如く上下平ふく周ハ三角四角五角八角
 等小く石工の切立如く色ハ青黒一是を掘出する跡もありて
 洞のごとく天下の廣きふハ珍奇ある事ありきものありけり
 是も奇石の類あるが筆の次ふまの

北越雪譜二編卷之三終

